



依

証

十二

一

手

秋うつや浪の静るに信はる
茶静

遠の香は流れて秋うつ禁る
一葉

秋うつや静るさよや恒はる
久藏

秋うつやあそびに静る
洞天

秋うつやさつらぬの二ツ刻
史子

秋うつやさやまよるや二日月
洞天

浮きつゝ佐世の船櫓秋や
一葉

藤の空はうららかに静る
茶静

秋うつやまを流るるに
風朗

と秋

楓むらあけ取あつと秋
茶静

秋のうらまえてるゆあに
ハ奈

と秋よりうららかに
風朗

流れてもあつたきやうに秋
ハ奈

来々秋

雨となつて秋の来よう
唯令

来々々来ぬ秋を思ふは御ゆる

茶新

秋の来しはわく々アおあうまう

秋の来て用おもあうまう造うな

あやうま秋や来よりん妹おろき

初秋

初秋の来しはわく々アおあうまう

そつ秋はわく々わく々泡の流るる

初秋や遠る灯照るる水ぬく

一葉

初一葉あつてはちうまなうま

初一葉あつてはちうまなうま

一葉あつてはちうまなうま

あうまう湖晴てきう一葉

あうまう湖晴てきう一葉

三葉あつてはちうまなうま

和あうまう偈は似合はぬ一葉

一色

風調

旧天

風調

旧天

史子

風朗

日人

一色

風調

素志

一色

七夕

七夕や禁下町のみちき

一蕙

七夕はきりぬきぬき

久藏

七夕もさうりぬき

史子

星

星きりぬきぬき

茶静

鯉の尾はさくさく

星はねのえりぬき

一蕙

かゝ小袖

かゝ小袖まゐて人よき

日人

梶の紫

梶の紫や虫さくさく

ハ奈

梶の紫はまゐて人よき

一蕙

天の川

天の川見つゑてみれ

素志

曉やけりうす天の川

ハ奈

涼しきよ誰も何向く天は川

久臧

ありあまるの楚でもしも水川

一色

押めあやまの消はせぬと水川

風朗

踊

踊はふおれのおは踊りて神

雪歌

雷は追ちてききききききき

ハ奈

鳴みへ押あまききききききき

史子

いそそそそそそそそそそそそそ

久臧

松の根を除く踊ふふふふれ

素尤

逆火

逆やや振れくくく人通り

素尤

むふふ火れくくくや本帰細

一色

送り火

送りやや送り送り送り送り送り

史子

草市

草市やふくれえりりりりりりり

ハ奈

盆 大文字

盆供

存ふよおとそをるや盆燈を

う布

何向くも杖をいぢやス又ま

久臧

見かれ道くまほす盆供哉

う布

魂 柳 瓜の馬

魂 柳の唯一日そくひちて

久臧

新甲へ鼻曳ひけて山のる

茶新

悪病もせむるをなうるのる

ハ奈

柳 経 蓮飯

柳 煙や傾城町を一旦都

一々

いそがし中ももうぬ蓮の飯

燈 籠

幸ね合ぬ隣りも盆に燈籠を

久臧

高燈籠本辻のうきと見ゆる

茶新

雪のけしきと格ふよ切籠うな

素尤

吾亦如燈籠之種をなす

一葉

何れも世にあらば切に實

日人

かゝ灯も立ぬ確かの燈籠を

唯令

はたも燈籠をゆゑ本に同し

史子

橋下で燈籠を里や高燈籠

ハル

墓より

聖日人なぬる身と墓より

日人

墓よりし祿宜れ墓より

一葉

朝日

種をせぬ朝日あらば

一葉

朝日や初をさる幾あり

ろ布

朝日の日度とやえん草の朝

素花

世うも来て朝日も朝の朝

系抄

朝日の地を這ふとて

唯令

朝日のつとて見てありぬ

史子

朝日も幾朝見ては

風朗

お魚や茶を入るゝ又一ツ 一々

お新又茶耀ふーや皿をはち 一々

茶

ちの茶記を茶めあうね 一茶

しーてもかゝる清くー茶の心 茶新

善ぬー茶を打合にめ茶 八茶

ぬの茶のまよふをかうう 日人

十足はと返さるゝや茶の茶 う布

所を除きて通うけられぬん 素衣

何向きて就ははらう茶のと即 一々

茶はーく思ふは茶めち茶又 雑令

雨うーく茶やう茶やう茶め茶 久蔵

えー二さい茶ははをいふ茶れう 史子

桔梗

ふいつふふやえ茶桔梗うな 風朗

お魚の桔梗買さうけと町 一々

女郎花

かゝてももう折るゝ女房も 風朗
けりやうそかけてけりやう 一色
折ちうそなくて又折る女房も 素心
えゝとては嘆くから女房花 曰人
女房もあつた女房もあつた 茶静
山深く来りて松より女房も 一葉
あやふく虫の喰ひ女房も 八采

野のあやふく人もなほあつた

一葉

萩

傾城の影ふゆゑや萩の茶 茶静
けりやうそかけてけりやう 素心
あつた女房もあつた女房も 曰人
萩のあつた女房もあつた 一色

築紫は行跡の

けりやうそかけてけりやう 史子

木 槿

いふふ日け蒼々木槿うな 久 戒

急なく木をうけ木槿哉 風 郎

折ふてあふのさめもやま 素 志

屋根替や木なつふやけ 一 色

唐

やちの柳はあや唐 素 志

門裏のふもえんはすや唐 河 天

唐々言つて志々アハハ 茶 抄

唐々言つて唐々言つて う 布

草 の 花

流よ咲ふもけうけうさ 一 葉

つくよ野を咲はる草のさ

田をうへ咲うけうけうさ 雄 令

花をうけ咲ても秋を 八 奈

草花をうけ咲ても折を 風 朗

芭蕉牡丹分根

秋をゆく思ひ切つ家とせびうね
う布

春の同々思ふなとせびうな
日人

さふそく牡丹かふや風の記
ハ朵

糸山蓮如実

ほめられも笑ふこととせぬ糸山^{ヘチミ}
ち布

如きや糸山よく記えとけり
旧天

蓮如実と人魂と死にけり
ち布

西山龍田雅

寺入け子の名もつゝ西山^ミ
素志

け本とけにの入うや龍田雅
久臧

稻妻

稲妻は涼くえなすや春戸^ハは
旧天

稲妻はあそく流う大はうね
素志

稲妻や雷^{カミナリ}なりし波のち
久臧

稲妻や人をあしづけはゆく
風吟

残暑

三日月おいつう見なむ秋暑
何事な記させ城のうへお暑哉
留外のお入秋お暑さかぬ
随ふ秋暑きとれ敷か
花火
度おめく御香花を結り
花火見し人や暑おさなむ
史子
久臧
日人
ハ奈

角力

角力
角力取所をばしあめ買し
角力人お扇をさうまけり
角力取枕もせしは梅より
史子
久臧
日人
ハ奈

秋風

秋風や新へ突こいし船
秋風やつと日おちる橋の根
史子
久臧
日人
ハ奈

し先や老より先は秋の風 一葉

秋風の吹まじりあり油照り 一葉

秋ふゆや奥座きこぬ様なり 素尤

栳垣は文樞なりや秋のせ 八葉

雲 霞

霞をくや夜なをそ袖はまきれ 八葉

ねく霞やうなく見ゆる物さほ 一葉

かきそめけうそをえなり霞のま ろ布

霞は日のかなやうまをうらう 久減

まうけて羽はなりと山の霞 雄令

ふくまおと思つて霞はせうかま 一葉

と秋虫の音を引いて霞は流さう 久減

夕山やかくとも霞はちち 八葉

うねさなううまなくぬきぬき 素尤

ねく霞は流してや氷の行 俊子

か霞の果はちばあはくをく 雪朗

虫

蛸は七夜原村おはう那	八 桑
人ら海へ稲妻や〜七夜夢	八 戒
風は〜神を世の中おはのす	一 意
色〜ひ〜夢に月をみればあま	四 天
明方下は海をな〜虫はあ	一 意
虫は夢に教を〜え袖の桜	八 桑
うたえむ〜夢も夢空の歌	素 志

〜〜

折〜を花へ〜を夢に〜	四 郎 明
二の夜へ〜を夢に〜	日 人
花は子に〜を夢に〜	八 桑
物〜に〜を夢に〜	一 意

蛸 蛉

蛸蛉は夢に〜を夢に〜	四 天
蛸蛉は夢に〜を夢に〜	う 布

名月やおゝまき門の松

茶静

名月や翼座もなれ萩芒

洞天

雨如申名月一寸とちほい

風朗

立寄也そ名月おひぬきまほし

日人

名月おゆて月さぬ端心哉

唯令

名月やほとろくくはゆの宿

う布

跡方なれ名月れ碌おうれ

久藏

名月お本間をこるきりうな

一と

名月や孝本まふ人のおれ

素心

名月れち思ひなり物のお

う布

名月お院やばうとそで城の衆

更ふ

名月やちかこちか作男

一葉

名月お一足きれそ本の間お

風朗

あつれ月

晩桂の光つて来るやけつ月

茶静

かき披寸やうはきりうお月

ハ奈

十六宵

十六宵や~~~~~と見もあは

風郎

十六宵とさるゑもあはききりうね

史子

裏と今いさようう世れおは

茶野

十六宵れ月入時といさよいぬ

う布

月

~~~~~はく痛なる月見え

一葉

月の雲をよきもつてらるゑ

一葉

十日ほどはれ西は入秋の月

日人

秋とて秋の趣も月ねる

雅令

~~~~~も換振ななや庭の月

史子

ニツなきをを自由は月え哉

一葉

~~~~~は月の雲りもつちけり

う布

二夜とあきうて月れ一ねを

雅令

廣沢より

月ねるうや近くはあ~~~~い

素太

お読で登を抜いし月見れ 一蕙

何所へ取の文て你ら月夜ま 雉令

ほめくといらきまけり月夜山 万布

月えりや縁を垂れ人も来ず 羽天

用しよきと月を接しけり 史子

志さくハききなり月夜けり 一蕙

月夜あつて月夜のなるとあり 雉令

月さすとはらるる月夜ぬち枕 羽天

月夜あつて月夜のなるとあり 万布

月夜のあつて月夜のなるとあり 一蕙

月の船テ浮きあつてあり 史子

川邊りよ灯を消ふ月夜のぬい 風朗

芒

田中よそくし月の芒を 素衣

月夜あつて月夜のなるとあり 史子

月夜あつて月夜のなるとあり 雉令

今様とて芒よとありはれき 曰人

きりて狗のけしきれ芒かき 茶都

笠きててえりて芒れ夕アム 碓令

歩一坊や何とも登つて得越し 洞天

むすいわすきよ芒れ這入に 八朶

花野

傘下のけしきききき 八朶

吹雪くやうに日暮るもむかし 茶都

稻の花

けしきぬききききき 三朶

稻のききききききき 八朶

けしききききききき 一朶

けしききききききき 一朶

けしききききききき 史子

稻

稻のけきききききき 素衣

於しとくええのち稲を稲ぢく  
宇治殿の柱みちつ結い稲  
船棹や稲の造り凡おさく  
ハ 奈

鶏 歌

鶏 歌 やむきもいふの形り  
穀 既の足えて披すや船切も  
鶏 歌 やけをいふも口けり  
ハ 奈

志をに 芙蓉

志 利又志をにちり掃除歌  
風 吹ぬにちちぬ志をにち  
菴 崎や志をにち掃をち  
能 揮なりを度めてふ芙蓉  
ハ 奈

若 妻 志

若 和りさへよけしをきそはち  
来 苗を畝にちきりやそそめ  
ハ 奈

池の傍に血ほくけく持てけふ 素心

鬼灯

鬼灯もひーほくみやまぢめ 一葉

ほくつれやもれーのふは桂をく 八束

葛

きぬ糸今めきめけく桂のた 史子

さふーゆきまきとほく小葛の 曰人

やくーぬおもは折ぬきぬ糸 八束

鷹

はとーは見えたるやうふき 曰天

近こて物厂はあけききき 茶抄

畑あつ行義ていなり厂は烈 素心

いつまき起くわうらわふ 曰朗

いのちや一つちくきふ 曰人

きふ月近き同きうわふ 曰天

厂啼やふのお城をト下ケ 史子

一 草や木は露を吸ひては

花は紅くは咲きしる

一 鴨の泳ぐ姿は

啄木鳥

木へはさきしる

木ははらばらに

鵲

庭の隅に

布

くちやうとて

鵲

くちやうとて

くちやうとて

くちやうとて

鵲

くちやうとて

くちやうとて

放生會 蛇 穴入

なまのうへにかいつてせぬや放生會  
う布

穴は入蛇えゆるまで 見送りぬ

鹿

常鹿で鹿ぬ一ツ灯 立ふたに  
素志

鳴うわ鹿の成成折木の根に  
ハ奈

端ふちと行きふ鹿を遠い  
史子

小男鹿とたは飯喰ふ妻ふ哉  
系新

鹿よゆいふるまきふたとも  
風明

物あふふまわてき鹿のき  
一葉

鹿笛や蹴つてた枝のき  
う布

無動くおしきとほし鹿のき  
久城

ほきと啼ふ啼きふ鹿の鹿  
洞大

鹿のき換ふのきぬ又えゆふ  
茶新

月の鹿うわい足をきいき  
う布

鹿鳴や今ふきふく口れ下  
雪新

宿つゝぬうちかゝ啼や半お席 日人

渡りる

十船ほど晴きふらやほりる 八束

ふらやふらふら来てなほる 久藏

とつやふはなれどしやうる 史子

行し鳥

虫腕を忘れてらけしきうら 日人

悔りおと迄えぬゆくしき 八束

集山子

今日ききくもけくたア 風郎

かゝそやええてかゝれ甲斐な う布

吹あれていさなれきゝかゝれ 素六

蹴さつゝ形りまたきゝかゝれ 一色

いけや井のふ田も立かゝれ 一蕙

岸のさきふかゝるなうりき 日人

泊り合ふ懐利も投げぬき 史子

子

変おと唱子ね同のくさうれ  
ち布

みちねの相董う消息くま

一糸ら陸奥くも虫唱子かな  
史子

給人の内澄つなく唱子  
日人

下り鮎

まゝあや漢よきあ  
下り鮎  
素志

川上といふあ  
秋そ鮎さ  
ハ采

野わ

湯かきんを浪浪の覚え  
史子

朝やあやな  
洞天

子あけ  
ろ布

湖のく  
風朗

朝き

朝きや畑よる  
久藏

朝きやあろ  
茶野

秋を

むねのうかぬ秋はきさ哉 日人

今年米 若穂草

船や見ゆきし今も米 八奈

ほろこは妹嫁でけりわう良、

秋を

水きぬら夜の更けふ米うれ う布

もにぬか一夜二夜にぬく 日人

もきぬの春は晴れあそぶ 久城

と泥も木の葉地をぬくも秋な う布

破

似てもよの海は文りきあそび 風朗

もよ良をぬきてうなるき 破 日人

渾のれきぬけとんえて枯うぬ 素木

渾一水

門ちをぬれそわつるやきしあ 雪朗



菊は花代きぬをしき 一葉

時ふゆふや菊は唐の 久城

菊はもれをてふそれぬ ハ奈

献立ふ添ておあり菊のされ 何天

東武重陽

天名は押されてふちつふれん 日人

ふれふち中菊は白いろ 素花

物とて故のふよう菊はむ 史子

小菊は花つて戻りや跡は菊 何天

照り込てけつと黄く菊のふ ハ奈

此菊は山ても咲とふれん 史子

菊折ふかいて亭主起しあり 素花

菊

本丸はむしなうけお菊の 史子

うけおの時とふたや初お菊 雅令

けけちむし月おありふちうな 素花

おきつえやつふとまゝくち仕度 八束

きいひらきいてお茶さるー市 茶抄

きうて色折られて色お茶我 唯令

栗端と大工と度るきうちい 日人

水廻れ日和りよ叶ふお茶うれ う布

厚お茶ちふお茶日お茶うま 一と

通天橋

残喘て吹つけてけけお茶うま 史子

弘<sup>ナメ</sup>系<sup>ナメ</sup>に飛這とれお茶うれ 茶抄

船見を橋や松お下お茶 日人

一日おうちをぬ茶の夕ア我 唯令

葉ちうふ度りそちけお茶うれ 風朗

いるきうきうけけーお茶 八束

村々のゆりおちけとみちかな 史子

おちけと詩もつうるお茶うれ 風朗

木れ子

草花や互に咲く番はうち 一々

猪垣や船の田々ぬ木の子心 茶軒

杉草や花の着々宿す家 日人

雲草を植ふま似す 是れ

未枯

うづ枯と葉れけしうづぬさ 史子

うづ枯の毛及畑や水の南 一々

栗柿

小庭に葉れけし栗柿 ち布

人の来てはさかち栗柿 風朗

後の月

小軒に葉てはさかち 旧天

本町に市に葉りや 史子

是れけし思義ふく ち布

後の月山を越ぬと湖をま 茶軒

雨月十三歌

せえてもし三日の朝ほとけの月  
はらやうらけうらもくほの月  
あきせはけふてえふはの月  
後れ月菴の法とて来より  
奥山はきく月もくろ十三歌  
蒼空は押えてあふはの月  
風朗

雨月十三歌

満ちてきく月もくろ十三歌  
あきせはけふてえふはの月  
風朗

新酒

あき川のきく月もくろ十三歌  
あきせはけふてえふはの月  
風朗

新酒

あき川のきく月もくろ十三歌  
あきせはけふてえふはの月  
風朗

山と名をかきしと里の秋の暮 史子

あり庭をけし我なり秋の暮 茶子

答ふに後よれあうに記の暮 一

順くよあきて来るるや秋の暮 日人

時々のうろくもせよ秋の暮 雅令

秋の山ハをなれよ暮よけり ハ子

山伏の山よ入るり秋の暮 素衣

秋の暮 秋の暮

あゝをを落来るるや秋の暮 ハ子

薄く秋のくもや秋の暮 河天

秋のあり見しとすしとるる茶子

百さへえややあふれ秋の暮 う布

子子れ動きよばやう記の暮 河天

やう時 秋の暮

紫のけりにあわし秋の暮 史子

あふはわいてのうろくもせよ秋の暮 日人

秋の雨

是れぬれに暮れにけり秋の雨  
うふくはくき秋の雨

秋の雨

秋の雨や土は枯れにけり  
風朗

秋の雨や土は枯れにけり  
史子

清くは土は枯れにけり  
唯今

秋の山

九月十二日芭蕉忌をうけ  
秋の山

秋の山やむくをまにけり  
茶抄

秋の山やむくをまにけり  
日人

秋

秋の山やむくをまにけり  
一色

秋の山やむくをまにけり  
日人

秋の山

秋の山やむくをまにけり  
茶抄

秋の言論なれやあまのけり

茶静

冬待行秋

冬待や日たきけきふりけり

史子

秋とけり取ふはさるるせり

ハ東

秋や秋そかなき恋もすれ

史子



Vertical text on the left side of the stamp, likely a library or collection identifier.

